**Chapter 1**

**月光の谷の影**

**章：珍しい正統派の英雄、お姫様、そして暴君 Pt.1**

ヴェイルの空気は、灰と沈黙で満ちていた。

**エーフィ**は黒曜石の蔓でできた檻の中に動かず横たわり、首に巻かれた抑制バンドのせいでそのサイコパワーはかすかに揺れているだけだった。廃れた神殿の片隅には月光さえ届かず、**バンギラス**はまるで玉座を奪われた王のように歩き回っていた。

「感謝するべきだぞ。」と、彼は砂利が擦れるような声で唸った。「選ばれることを懇願する者も多いんだ。だが——俺は、今のところは我慢してやる。」

**エーフィ**は微動だにせず、その視線を彼に向けた。「**ブラッキー**は私を見つけるわ。」疲れ切った声で、彼女はささやいた。「そして、彼が来たら——」

**バンギラス**の笑いが、神殿の石を揺らした。

－－－

遥か離れた崖の上で、**ブラッキー**は砕けた断崖に立ち、長時間たどってきた匂いの痕跡を目を細めて追っていた。その体のリング模様が怒りに反応してかすかに光っていた。隣では、**ピカチュウ**がまばたきをしながら、退屈そうに、そしてやや苛立たしげに見ていた。

「これのために俺を引きずり出したのかよ？」と**ピカチュウ**はつぶやいた。「今夜は予定があったんだぞ。呪われた土地でお前の恋愛ドラマを追いかける予定じゃなかった。」

**ブラッキー**は彼の方を見ずに言った。「僕に借りがあったよな？」

**ピカチュウ**はうめいた。「借りがあったのは認める。でもそれ、死ぬ覚悟のことじゃねぇからな。」

－－－

**第二章：廃神殿の残響**

神殿の入り口は沈黙に包まれ、ねじれた茨が生い茂り、粗野なルーンが刻まれていた。長らく無視されてきた警告だった。

薄暗い中、ブラッキーのリングが淡く光を放ち、影の間をすり抜けるように進んでいく。その後ろをピカチュウが渋々ついていき、足元の石の軋みにあわせて尾をピクリと動かした。

「で、作戦は？」ピカチュウが小声で尋ねる。「突っ込んで、“彼女を返せ！”って叫んで、でかい山男に潰されんのか？」

ブラッキーは答えなかった。

「…作戦なんてねぇんだろ」ピカチュウがぼそりとつぶやいた。

「目的はある。」

「ちっ、出たよ。復讐モードかよ。」ピカチュウの毛皮にバチッと静電気が走った。

－－－

神殿の奥深くで、エーフィがわずかに身じろぎし、微かな音に耳をそばだてた。バンギラスは石の祭壇の前に立ち、爪でその縁を苛立たしげに引っかいていた。盗んだ花びらと鋭い結晶で祭壇を飾っていたが、それは魂のない儀式の模倣にすぎなかった。

「俺たちなら完璧になれる…」半ばエーフィに、半ば自分の頭の中の亡霊に語りかけるようにバンギラスは呟いた。「お前は光を知ってる。俺は闇を知ってる。バランスってやつだ。」

エーフィの額の宝石が弱々しく光った。「バランスなんて望んでない。従順さが欲しいだけでしょ。」

－－－

そのとき、神殿がわずかに震えた。

バンギラスが振り返り、鼻を鳴らす。「来たか。」

そして上階の回廊から、ピカチュウが石を砕いて飛び込んできた。空中で叫ぶ。

「やっぱ罠じゃねえか、これ！」

すぐ後に、ブラッキーが影のように飛び込んだ。

「彼女を……返せ。」

－－－

**第三章：神殿の落日**

戦いは雷鳴と怒りのようだった。

ブラッキーが先に動き、音もなくバンギラスの脇腹にシャドーで満ちたイカサマを叩き込む。だがバンギラスはほとんど動じず、即座にカウンター。足元の床からストーンエッジが噴き出し、ブラッキーを壁に叩きつけた。骨の軋む音が響く。

「ブラッキー！」エーフィが絶叫した。目を見開いて恐怖に震える。

ピカチュウが雷鳴のような声で吠えた。「１０まんボルト！」

光線がバンギラスの胸に直撃し、一瞬よろめかせる。空気には焦げた砂とオゾンの匂いが漂った。

だが、バンギラスは笑った。

「チャンスはやったぞ。」低く唸り、猛スピードで突進する。

回避しようとしたピカチュウを、爪が捉えた。一撃。最後の悲鳴。

静寂。

血を流しながら、ブラッキーがエーフィの檻へ這う。鼻先を彼女の額に寄せ、かすれた声で呟いた。

「ごめん… 守れなかった…」

そして、バンギラスが最後のあくのはどうを叩き込み、影が彼を呑み込んだ。

－－－

**第四章：塵の儀式**

エーフィが叫ぶ。サイコパワーが虚しく爆ぜる。

「化け物っ！」

バンギラスは立ち上がり、彼女を祭壇へ引きずっていく。

「奴らは戦うことを選んだ。お前は…生きることを選べ。」

棘で作られた鈍い冠を彼女の頭にかぶせ、一歩下がる。

「この瞬間を忘れるな。世界が運命に屈した日のことを。」

－－－

だが、崩れかけた壁の上から、誰にも気づかれずにブリッスル（ハピナス）が見下ろしていた。かつての侍女。慈悲を語ったことで見捨てられた者。

彼女の手には一枚の羽があった。あの残酷さの前の、優しさの時代に贈られたもの。

「もう…いいでしょう…」羽を月明かりにかざし、震える声で囁いた。

「…どうか…聞いてください…」

突如、風が神殿を駆け抜ける。

空が、金と炎で裂けた。

ホウオウが降臨する。

－－－

**第五章：不死鳥の再誕**

バンギラスが振り向いた時には、もう遅かった。

ホウオウの翼から聖なる光が放たれ、生命が蘇る。神殿全体がその神力に震え、ブラッキーの体に金の炎が灯る。傷が見る間に癒えていく。

ピカチュウも目を覚まし、呆然とした顔でしばらく固まったのち、一言も発さずに森へ逃げていった。

ブラッキーは立ち上がり、燻る金の光を纏ったままホウオウを見上げる。

「なぜ…？」

ブリッスルが前に出た。

「彼女があなたを愛していたから。そして…誰かが、思いやらねばならなかったから。」

ブラッキーは彼女を見つめ、泣き続けるエーフィへと視線を移す。

その声は低く、だが揺るぎなかった。

「第二幕だ。」

Chapter 2

**シーン六：影の監視者たちの包囲**

神殿は今や要塞と化していた。

バンギラスの命令により、彼の精鋭のあくタイプの番人たちが警戒していた：

* アブソル、沈黙の中に不吉な眼差しを光らせて。
* ダークライ、悪夢そのもののように壁をすり抜けて漂う。
* ヤミラミ、目に宝石のような輝きを宿し、いたずら心でにやにや笑う。
* そしてゾロアーク、ただ一人の雌、獰猛でずる賢く、全てを疑っていた。

神殿内部では、バンギラスが最後の準備を進めていた。エーフィは儀式用の白い絹に黒曜石の糸が編み込まれたドレスに縛られ、うめくように抵抗していた。彼女の涙が静かに落ちていた。

「もう神すら変えられねぇ。お前は俺のものになるんだよ…」

——

外では、ブラッキーがホウオウの前に立っていた。伝説の鳥は黄金に輝いていた。

「お願いだ、」ブラッキーは深く頭を下げた。「奴らを引きつけてくれ。すべてを受けてくれ。一度だけでいい、チャンスをくれ。」

ホウオウは瞬きをし、天を揺らす鳴き声を上げた。

空が再び裂けた。

炎が天から降り、ホウオウは神殿へと舞い降りた。炎と光で影を打ち払う。アブソルとダークライが即座に反応し、ナイトスラッシュとダークホールで反撃。ヤミラミは羽根をすり抜けながら笑い、ゾロアークは幻影の中に消えた。

——

混乱の中、ブラッキーはブリッスルにうなずいた。彼女はすでに動いていた。裏道を素早く、静かに抜けていく。心臓は早鐘のように鳴る。任務はただ一つ――エーフィを解放すること。

しかし到着した時、

エーフィはすでに祭壇に縛られていた。バンギラスが最後の呪われたヴェールを手にして立っていた。

「……！」

ブリッスルは息を呑んだ。

——

その頃、森の中ではピカチュウが足を止めていた。

戦いの音が背後から響く。

「……俺はネズミだ。だが、逃げネズミじゃねぇ。」

彼は低くうなり、火花を散らしながら神殿へと走り出した。

**シーン七：不死鳥、堕ちかける**

ホウオウは壮麗に燃えながらも、ついに揺らぎ始めていた。

アブソルの刃が確実に傷を与え、ダークライのダークパルスが聖なる羽根を裂き、ゾロアークの幻影が神すら惑わせる。ホウオウは最後のせいなるほのおで敵を退けたが、その翼は垂れ、炎もかすかだった。

「もう…再び飛ぶことはできぬ…」ホウオウが喘いだ。

ブラッキーは傷を負いながらも、その前に立ちはだかった。「ならば、俺が代わりに立つ。」

ナイトスラッシュが脇腹を切り裂く。ブラッキーはうめき、倒れかけた――

その瞬間、稲妻が夜を裂いた。

ピカチュウが怒りを帯びて飛び込み、「でんじはッ！」

アブソルが痙攣し、動きを止めた。戦局が一変する。ゾロアークは煙の中へと消え、ダークライとヤミラミを連れて撤退した。

だがピカチュウは気づかなかった。

ゾロアークが再び現れた、エーフィの姿で。

「エーフィ…？」ピカチュウは瞬きした。

スラッシュ。

血が飛び散る。ピカチュウは再び倒れ、息を切らした。

「やめろォッ！！」ブラッキーが吠え、怒りのはらいせを込めてふくしゅうを放った。ホウオウが空から光の裁きを下し、幻影が消え、ゾロアークは気絶した。

ホウオウの残り火がピカチュウに降り注ぎ、呼吸が戻る。

「俺…二回も死んでんだけど…三回目はチャージで頼むわ…」ピカチュウがかすれた声でつぶやいた。

——

その頃…

神殿の奥、静まり返った裏廊下で、ブリッスルはエーフィに手が届きそうだった。ヴェールの最後の糸に手を伸ばした、その時――

背後からささやき声。

ダークライの冷たい息。ヤミラミの手が腕を掴む。

彼女は一度叫んだ、そして闇に呑まれた。

**最終章：救われし影と、暴君の終焉**

戦いの残骸の中、ブラッキーは倒れたゾロアークとアブソルの前に立っていた。復讐ではなく、慈悲の光を帯びて。

「闇で終わる必要なんてない。」

ゾロアークがうめきながら動く。「あたし、まだ600ポケ借りてるんだけど…利息つきで。」

「払ったわよ…そのうち…」エーフィがテレパシーでため息をついた。

アブソルは目を伏せていた。「スキンが欲しかったんだ…伝説級10種が一気に来たんだよ。…心が折れた。」彼は顔を背けた。「こんなはずじゃなかったのに…」

ブラッキーは手を差し出した。「なら、今度は一緒に戦おう。」

彼らはその手を取った。

——

その時、バンギラスが再び現れ、神殿の壁をぶち破って登場した。怒りは増し、今や歪んだメガストーンのオーラを帯びていた。

「俺に逆らう気か…全員でかァッ！？」

ブラッキーが一歩前に出た。その背後には：

* ピカチュウ、尾が決意の火花を散らす
* ゾロアーク、幻影を身にまとい
* アブソル、鋭く澄んだ眼
* ホウオウ、再び神火をまとう

バンギラスは地と影の咆哮とともに突撃した。

彼らは、まさに神々の如き一撃でぶつかり合った。

——

その最中、ゾロアークとホウオウは戦場を横から包囲し、背後から出現したダークライを撃つ。ゾロアークは幻影で翻弄し、ホウオウは悪夢を神火で焼き尽くす。

一方、アブソルとピカチュウはヤミラミを追い詰める。ヤミラミは狂ったようにシャドークローを振り回すが、アブソルの冷静な斬撃がそれを断ち、ピカチュウのサンダーボルトが決定打を与えた。

その途中、アブソルがピカチュウにささやいた。「援護してくれ。」

彼はひっそりと戦場を離れた。

——

神殿の中、ブリッスルとエーフィは影の鎖に縛られていた――

スパッ。

アブソルが背後から現れ、無言で拘束を切り裂いた。

「遅いじゃない。」ブリッスルは埃を払った。

「サイドクエストだったんだ…」彼は呟いた。

——

前線に戻ったブリッスルは全力のいやしのはどうを放ち、状態異常を打ち消し、ブラッキーの力を回復させた。エーフィも加わり、無言でうなずくと、サイケこうせんがバンギラスの装甲を切り裂いた。

ふたりの連携技が炸裂。エーフィのサイコパワーとブラッキーのあくのはどうが、歪んだ力を断ち切る。バンギラスは咆哮した。

そして、最後の一撃は五体同時に放たれた：

* ピカチュウのボルテッカー
* ゾロアークのナイトバースト
* アブソルのメガホーン
* エーフィのサイコショック
* ブラッキーのラストリゾート

バンギラスは倒れた。

砕け、沈み、意識を失う。メガストーンは粉砕された。

——

神殿には静寂が戻った。風が残りの塵をさらった。

ブラッキーはホウオウに向き直った。「終わった。」

ホウオウはうなずいた。「闇を選ばず、光を選んだ。だからこそ、お前たちは英雄だ。」

ピカチュウはその場にドサリと座り込んだ。「次の章では死なないで済む？」

バンギラス、ヤミラミ、ダークライ（いずれも気絶）は置いてけぼりにされ、他の全員が笑った。